

●下条由紀子さん（「ランナレズ」編集局長）

日本はスポーツ界への女性の参入が全般的にまだまだ遅れています。下条さんは、女性スポーツを応援、推進しているWSFジャパンの活動に賛同し入会してくださいました。

ご自身も「より多くの女性が、生活の一部としてスポーツを楽しむことができるようになるれば」とその普及に努めています。

「WSFジャパンには、更に広範囲に活動し、より多くの人たちを取り込み、その存在を一般に認知されるようになってほしい」との注文もあります。下条さんは、昨年十二月にハワイのホノルル・マラソンに参加し、今年の一二月には、デイズニー・ワールド・マラソン（米国・フロリダ）も走りまわした。（いずれもフルマラソン）。生活の一部のスポーツを、実践しています。

●川淵三郎さん（社団法人日本プロサッカーリーグチエアママン）

いまをときめくJリーグ（社・日本プロサッカーリーグ）が、WSFジャパンの団体会員になったのが九二年六月のこと。そして一年半後、今度はチエアママンの川淵さんが個人会員になってくださいました。

入会の動機は「Jリーグで理事をお願いしている三ツ谷さん（WSFジャ

パン代表）をサポートしたいから。現在、気にかかっているのは、日本の女性は結婚してしまうと、欧米の女性と比べスポーツをする機会が減る、ということですよ。

WSFジャパンに対しては、「女性に限定せずに、スポーツ界全体の地位向上をめざしてがんばってほしい。今後を楽しみにしています」という励ましの言葉をいただきました。

●飯田貴子さん（帝塚山学院短期大学 教員）

昨秋、「目でみるシニア健康体操」を、

Hot Line

会員の広場

松本由子さん（WSFジャパン会員）と共著で出版しました。

短大で「健康・スポーツ科学」を教

えている飯田さんは、数年前から女性学に興味を持ち、「女性論」の講義も受け持っています。いま関心のあるテーマの一つが、古い文献にあった「女性の社会的地位の高い地域の方が、低い地域よりも体格・体力の男女差が小さい」。これは現在でも当てはまるのではないかといます。日本のように女性の社会的地位の低い国では、女性は「女らしさ、か弱さ」を要求され、男

性より体力のないことが美德になるので、体格・体力差は大きくなって当然と思われているのです。

「でも、筋力や瞬発力が、現在の社会の中でどれほど役に立つのでしょうか。男性が自分たちの優越性を誇示したいがために考案したものではないかとさえ思えます。現代にマッチした体力とはそんなものではないはず。一般的に女性は男性よりも長命です。健康に凶たく生き抜くための持久力こそ、いま必要なのではないでしょうか。これが飯田さんの反論の主旨です。

●伊東惇子さん（幼児スポーツ研究 会代表）

情緒障害を持つ子供たちに水泳の指導を始めて、すでに二十年以上になるという伊東さん。「めだかの水泳教室」と名づけたこの教室では、障害のある子も、ない子も、一緒になって水泳を楽しんでいます。「誰が生徒か先生か。お互いに教え、教えられる」そうです。

いつも、みんな一緒に、という考えで指導をしていたので、これまでの体験では、特に男女別の大変さを感じた

ことはなかったと言います。

「男女共生、男女は対等の時代」といわれるようになりましたが、見えな部分では、まだ様々な問題があるスポーツ界。今後、WSFジャパンでそのような点を見直し、解決のために取り組んでほしいとおっしゃる伊東さんです。

●村田芳子さん（岡山大学教育学部 助教授）

村田さんの専門はダンス。大学ではその領域から「体育教師」を育成しています。ダンスの世界は以前は女性ばかりでしたが、最近では男女共習が当たり前になってきました。

九三年二月に開催された「生涯スポーツコンベンション」の「女性とスポーツ」の分科会で発表者として参加した際、この分科会設定の立役者であり助言者でもあった三ツ谷さんと出会ったのがWSFジャパンへの入会のきっかけということ。この発表のため「女性の解放や自立に向けた資料は多いのにスポーツに関するものが極めて少なく、スポーツや教育の世界には男性優位の状況が根強く残っていること」でした。バラエティーに富んだ顔ぶれの会員が並ぶWSFジャパン。「男女共生の時代にふさわしい組織作りを期待しています」とのことです。